

特集 奄美群島の 世界自然遺産登録をめざして

奄美群島は、トカラ列島と沖縄諸島の間に連なる奄美大島、加計呂麻島、請島、与路島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島の8つの有人島からなる島々で、アマミノクロウサギなどの希少野生動植物が生息・生育する亜熱帯の森や美しいサンゴ礁などが多くの人々を魅了しています。

平成15年、環境省と林野庁による「世界自然遺産候補地に関する検討会」において、奄美群島を含む「琉球諸島」が世界遺産の登録基準を満たす可能性が高い地域の1つとして選定されました。

県では、奄美・琉球諸島の世界自然遺産登録の早期実現に向けて、地元市町村や国の関係機関などと連携しながら、国立公園などの保護地域指定の推進や普及・啓発活動などに取り組んでいます。

世界遺産とは

世界遺産とは、UNESCO(国連教育科学文化機関)の「世界遺産リスト」に登録された遺産のことで、国家や民族を超えて人類が共有し、次世代に受け継いでいくべき価値をもつ遺産を対象とします。

世界遺産には自然遺産、文化遺産、複合遺産の3種類があり、2008年7月現在 自然遺産 174件、文化遺産 679件、複合遺産 25件、合計 878件が登録されています。

国内の自然遺産は鹿児島が誇る「屋久島」や「白神山地」、「知床」の3地域です。

また、県では「九州・山口の近代化産業遺産群—非西洋世界における近代化の先駆け」の世界遺産(文化遺産)登録を目指した取組も進めています。



世界自然遺産「屋久島」(永田 岳)

世界遺産への道のり

世界遺産登録の前提として、数年以内に推薦する物件の「暫定リスト」を、政府がUNESCOの世界遺産委員会に提出する必要があります。

また、推薦にあたっては、推薦地域の価値や保護管理体制を記述した「推薦書」を世界遺産委員会に提出し、審査などを受けることになります。

奄美・琉球諸島の自然の特徴

奄美・琉球諸島の成立はプレート運動とサンゴ礁の働きによるところが大きく、大昔から中国大陆や日本列島と陸続きになったり、離れたりを繰り返して、多くの島々で構成される現在の姿ができました。

また、世界の亜熱帯地域に比べると例外的に雨が多いため、豊かな亜熱帯性照葉樹林が分布しています。そして、海岸のマングローブ林、浅海のサンゴ礁と特徴的な生態系が連続してみられます。そのため、太古の昔、大陸から渡ってきた生物が各島々で独自の進化を遂げたことと相まって、遺存種や固有種が多い独自の生物相を形成しています。

亜熱帯性照葉樹林

奄美・琉球諸島では、モンスーンのもたらす降雨により、世界の亜熱帯域の中でも限られた地域にしかない亜熱帯性照葉樹林が成立し固有種や希少種の主要な生息・生育地として生態系の基盤になっています。生息する代表的な動物として、アマミノクロウサギやケナガネズミ、オオトラツグミ、オーストンオオアカゲラ、アマミヤマシギ、オットンガエルなどがあげられます。



サンゴ礁

サンゴ礁とは、サンゴや有孔虫など石灰質の骨格を持つ生物の死骸が長い時間かけて堆積してできた「地形」です。奄美・琉球諸島のサンゴ礁は、世界でも高緯度の地域に位置し、同緯度にある他のサンゴに比べ種の多様性が高いのが特徴です。サンゴ礁は、すばらしい景観をつくりだすとともに、海の生態系にとって大きな役割を果たしています。



生物の多様性

奄美・琉球諸島はアマミノクロウサギやヤンバルクイナ、イリオモテヤマネコなど数多くの固有種の生息・生育地になっているほか、種の多様性に富むサンゴ礁生態系が見られ、世界的に見ても生物多様性保全上重要な地域です。また、渡り鳥やクジラ類、ウミガメ等の繁殖地や産卵地となっており、移動性の高い種群を維持する上でも重要な地域です。



アマミノクロウサギ



ヤンバルクイナ



イリオモテヤマネコ 写真：環境省